

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2007年 秋号 10月10日発行／季刊
発行人：進藤 禮治郎
連絡先：府中市日新町 4-5-24
TEL 042-366-2134

どうする、どうなる府中のごみ問題

ごみボックス収集維持を公約していた府中市長は廃棄物減量等推進協議会1月の答申を受けて「有料化、戸別収集、ボックス撤去」の方針を打ち出した。市民の間にはとまどい、共感など受け止め方に大きな差がみられます。府中かんきょう市民の会はこの問題について「研究会」を立ちあげ、市への提言を行う議論をはじめています。突然の市の方針転換をどう受け止めるべきか、府中のごみ問題をどうすればいいのかといった8月17日に行った議論を掲載します。
(敬称略／順不同)

ボックス撤去を前提にした有料化

西宮 府中市はボックス撤去を前提に、ごみの戸別収集・有料化を進めようとしています。市民にはごみ問題が共有されていません。有料化、戸別収集、ボックス撤去でどんな問題が出てくるのか、問題点や課題を整理する必要があります。

田上 市側の姿勢だが「広報ふちゅう」や文化センターにチラシを置く程度で、この重大な方針転換を市民に説明していることになるのか。

一方通行でなく疑問に答える双方向での説明が必要と思う。現状では市民は有料化は既定の方針と受け取っている。

田中 ボックス廃止は賛成だが、市長はボックス継続が公約

だった。突然の公約破棄は無責任で、政治姿勢が問われる。

ごみボックスは転入動機のひとつ

伊吹 40年間暮らしてみても府中は生活環境もよく、三多摩の中で最も発展していると思っている。若い人の転入には、ごみボックスがあるからというのも動機のひとつだ。市にはボックスがあることも府中市が発展した理由のひとつという認識があるのだろうか。

ボックスを継続するうえでの問題点を示し、それが解決できないから廃止というならわかるが、有料化推進のためのボックス廃止は納得できない。

(次ページへ)



ごみボックスに貼られたごみ改革の
スローガンだけが一人歩きしている。



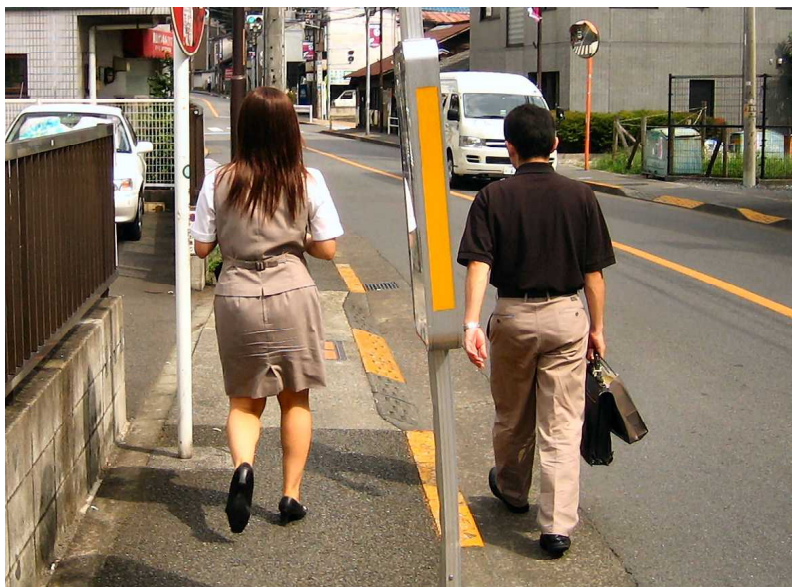
⑪

狭い歩道空間

狭くて危険な旧甲州街道については前にも取り上げたことがありますが、片町2丁目付近の歩道は、車道との段差が15センチもあるうえ、さらにバス停、消火栓表示板、街灯、電柱などがあちこちに立てられており、歩行者や自転車を悩まし、人が並んで歩くことも出来ない状況にあります。

市民の安全を守る立場の行政は、拡幅も出来ないこのような歩道の改善に少しでも取り組んでほしいと思います。

写真は旧甲州街道片町2丁目付近





西宮 幸一

竹田 勇

前川 浩子

(前ページから)

市民モラルの向上が課題

杉山 市は来年1月の市長選挙前にマスコミ用にアドバルーンをあげ、市民の動向を見ているのではないかな。現在、市民の前にはタイムスケジュールなどなく、想像、仮説で話し合うしかない。ごみ減量は人間が文化的生活を送るためのエンドレステーマだ。市民のモラルをどう向上させるのか会として提起していくものは何か。来年1月の市長選で、ボックス方式の継続を公約する候補が当選したら、市の既定方針は、白紙に戻ることである。

自区内処理の提起もない

竹田 環境塾ネットでも毎年ごみ問題を取り上げているが、今年はごみ関連施設の見学を予定していて、武蔵野市クリーンセンターを下見した。焼却施設は市の中心部でしかも市役所の隣だ。いわゆる自区内処理の思い切った市民への提起で成功したと思う。府中には焼却施設を作る意見が出てこないなど、受け身で、対症療法的な姿勢が改善していない。

前川 毎年の市民意識調査では8割がボックス方式を支持している。住みやすい条件の一つだが、この声を聴く姿勢が市にはない。平成16年の「1万トン減量作戦」の検証もない。15年前、市は緊急事態宣言をしたが、今は危機感がない。「地域コミュニティ」を「ごみコミュニティ」として位置づけてとりくむべき重要課題だという声もある。

方針転換の危機感がみられない

竹内 平成15年の府中市環境基本計画で、「10年以内にごみ半減」の方針が確立された。その2年前、三多摩市長会でごみ有料化を申し合わせ、近隣市が実行していった。市長声明では、二枚橋焼却場の閉鎖が見込みより3年早く、また多摩川衛生組合には全量を引き受けてもらえるとする目論見があったなど、八方ふさがりとなり、方針転換したと読める。危機感がない。

有料化・戸別収集は先に「ボックス廃止ありき」で進んでいる。有料化で減量が進んでいる日野市に行くなど、会としても情報を集めて市への問題提起が必要だ。

梅沢 市長は市民へのごみ政策の転換を説明することが先決で、地域で市民懇談会を開いたり、ホームページで動画や肉声で見せたりなど、いろいろな方法で市の姿勢を示すが必要と思う。また、ボックスを利用しながらどこまで削減できるかを6カ月から1年かけて実験してみることもひとつの方法だと思う。

ボックスを利用しながら減量もできる

西宮 府中市は減量を進めることに関する情報提供が不十分だと思うが、ボックスを継続する問題点、廃止するうえでの問題点、有料化の問題点、有料化しない場合の問題の整理が必要と思う。

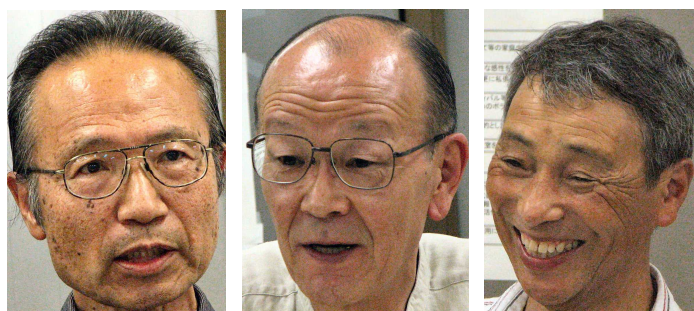
伊吹 有料化で小金井市や武蔵野市はうまくいっている。府中はボックスを利用しながら、減量する方法もある。これでごみが減らなければ、廃止もやむをえない。

きめ細かな課題整理も必要

竹内 ボックス廃止で問題は「ごみ出しルール」が守られないことにある。戸別収集の場合・・・①指定ごみ袋以外の袋で出した場合の生ごみ収集拒否で臭いなど近所迷惑。②自宅前への不法投棄問題。③資源ごみ収集法が現段階で不明。④可燃、不燃、資源の収集サイクルも不明(廃プラはすぐにたまってしまう)。⑤道路の生ごみ置き場では車がひいてしまう問題。⑥集合住宅のごみ置き場問題、収集後の衛生管理問題などが想定される。

有料化・・・①手軽に入手できる指定袋。②70歳以上世帯は無料など高齢者・障害者への配慮。③有料化は実質税金のアップだが、無料戸別収集の三鷹市、多摩市もある。④納得できる指定袋の料金などの課題がある。

ごみ排出抑制策・・・①可燃ごみの50パーセントを占める生ごみの家庭内処理機購入補助の引き上げ。堆肥の利用システムの確立。市民が利用できる処理機を文化センターに設置する。②植木の剪定枝ごみまで有料にするのは緑化推進にブレーキがかかる。公園で「チップカー」が無料回収すべき。③スーパーなど売側の過剰包装をやめさせ、詰め替え品販売、レジ袋有料化の行政指導も必要といった課題がある。



伊吹 矩章

杉山 敏

田上 昌宣

ボックス廃止の条件

40年続けてきたボックス方式を廃止することは市民生活に大きな影響を与える。ごみ減量はボックス廃止なくして難しいということを、市民を納得させることが必要だ。

伊吹 ボックス方式廃止の条件として…①ごみ置き場は自宅敷地内。②指定有料袋への記名。③回収は週1回以上。

減量には…①ボックスの施錠(住民以外の利用制限、事業系ごみ排除) ②指定有料袋への記名 ③町会の見まわり ④生ごみ堆肥化全額補助 ⑤監視カメラ設置 ⑥越境投棄を防ぐボックス配置の工夫 ⑦ボックス使用での減量実験を6カ月から1年実施するするための町会を募集。ボックス方式を廃止したくない市民の動きは必ずあるはず。

ボックス施錠でできる減量

田上 ボックスを残して減量については「ボックスに鍵をかける方式」で、減量の成果が出ている自治会がある(栄町2丁目)。行政指導で全市に広げればよい。

西宮 こういうことをやるにはお金がかかるが、そこまでして、なぜボックス方式を残したいのか。

伊吹 ボックスは市民にとって快適な暮らしの象徴となっている。市が発展してきた要因の一つだ。

杉山 例えば、一人当たりのごみ排出量が調布ぐらいまで減ったらボックスを廃止しないなどの具体目標も必要だ。

有料化のためにはもっと議論を

館 府中市民の一般家庭ごみと、他市のごみとどこが違うのか、比較分析すれば対策が見えてくるのに、そうした構えが見られない。科学的に対処すべきだ。

前川 市民の意識を変える事が大切。多摩市は有料化に際し、広報活動に力を入れた。町田市や清瀬市にも注目すべき点がある。日野市は市民説明会を行い、20回以上市長が出向いたし、市長宅のごみ量まで公表している。

杉山 減量成功へのカギはモラルの向上か、それとも有料化か。もっと議論や研究が必要だ。



梅沢 みどり

浅田 多津子

竹内 章

町会加入率が減少している

竹田 地域のごみ減量推進委員の熱意には雲泥の差がある。熱心な人は、ボックスの脇に夜まで立っている人もいるほどだ。モラルはどうしたら向上するのか。

竹内 ゴミ出しルールが守られない背景には50パーセントといわれている単身者世帯の町会への加入問題がある。回覧板が回らないし、新聞すらとらない世帯も増えている一方で、高齢化で町会から離脱する世帯もある。

生ごみ堆肥化やバイオ推進も

浅田 高齢化率48パーセントの徳島の上勝町は34種類の資源分別で、生ごみを含め84パーセントをリサイクルしている。この住民あげての意識改革に学ぶべきだ。

前川 生ごみの堆肥化やバイオの推進も必要だ。

西宮 討論では、市には市民を巻き込む姿勢が大きく不足しているという指摘が、共通して出されたと思う。また、ダストボックスの是非など収集システムのあり方については、たとえば資源物の品質確保に欠かせない分別の促進につながるかという観点や、ごみ出しルールを守らない人々がいるという点を考慮しての設計が求められる。その意味で、収集システムの検討に先立ち、どういった課題を優先して考えるかの順位付けと、それに関する情報の発信と共有が必要とあらためて感じた。

<以上>



田中 正仁



館 浩道

生ゴミ処理機 自治体購入補助状況						
市町村	部署名	電話番号	助成金額・助成金条件	助成台数	販売店指定	対象メーカー
府中市	生活環境部廃棄物対策課リサイクル担当	042-364-4111	助成金額 ¥10000 購入金額の1/2 助成金額の条件(上限)	配給機が壊れたとき	指定無し	全メーカー
小金井市	ゴミ対策課	042-383-1111	助成金額 ¥50000 購入金額の4/5 助成金額の条件(上限)	先着1000名	指定無し	全メーカー
調布市	ゴミ対策指導係	042-481-7111	助成金額 ¥20000 購入金額の1/2 助成金額の条件(上限)	配給機が壊れたとき	指定無し	全メーカー
国立市	ゴミ減量課清掃係	042-576-2111	助成金額 ¥20000 購入金額の1/2 助成金額の条件(上限)	配給機が壊れたとき	指定無し	全メーカー

2007年4月現在

購入金額により助成金額は変わります。

※詳細は、上記自治体担当部署にお問い合わせ願います。

080214

大型家電店の生ごみ処理機売り場で見かけたもの。ここにも減量への府中市の意気込みが見られない。

真夏を体験した『田んぼ学校2007』

1本植えた稲が1メートルを超え、分けつ数も10～20本に増え、出穂間近に成長しました。

今頃は穂が出て花が咲き、カカシに守られて実りつつあります。あとは、秋の稲刈りとハサかけ(9月29日)、収穫祭・終了式(10月27日)を残すのみとなりました。特に暑かった今年の真夏の『田んぼ学校』からの報告です。



スタッフの助けを借りて「除草機」を動かす子どもたち

植物観察・田んぼの草取り

ネイチャゲーム・・・(6月16日)

この日は「自由参加」にもかかわらず、半数以上の出席者がありました。すでに浮き草が圃場を一面に覆っていました。農業は「草との戦い」ともいわれるほど除草作業が大変です。

手取り、除草機(手押し)、除草剤散布の除草方法などがありますが、今回は50年ほど前まで各地の田んぼで行われていた「手取り」と「手押し」を体験してもらいました。

浮き草の下には生育が抑制されたコナギ、オモダカ、タカサブロウなどが繁茂していました。「手押し」除草は昔は子どもが手伝う農作業の1つでしたが、希望者がトライしても動かすことすらできず、スタッフの加勢が必要でした。また参加者同士のコミュニケーションを図るのにネイチャゲームが効果あり、面白いものでした。

顕微鏡観察、食物連鎖図、生き物の同定などで活躍してくれました。

水中には、実に多くの生き物がいて、互いに「たべる、たべられる」の関係があり、1ミリメートル程度の小動物も子孫繁栄を図るため必死に生きていることが何とか理解されたのではないかと思います。

アメンボ、ホウネンエビなど20種を超える生き物を採取しました。少人数であったので、ビニール・ハウスの中で、水槽に採取した生き物を入れ、実物を前にしての解説と質疑・応答がなされたのが効果的でした。



「背中の動物なあに？」
ネイチャゲームに興じる子どもたち



稲のなかで育っていたニカメイチュウ

イネの生長・水中の生き物観察

・・・(7月14日)

台風が近づき、雨となりましたが予定通りの実施です。スタッフが子ども参加者を上回り、特に農工大スタッフは、



「わたし美人でしょ」
素敵な力カシもできました

イネの生長・生き物観察・・・(8月4日)

まさに真夏日。木陰と冷水が欲しいなか、夏休みとあって、大勢の参加がありました。

イネは、すっかり生長していました。稲体に付く生き物をすくい網で採取しました。ツマグロヨコバイが多くウンカ類はいませんでした。子ども達の虫を追いかけると目が輝き、虫の名前やその変態などをよく知っていて驚きました。網には捕らえないが、水稻の最大の害虫であったニカメイチュウ(二化螟虫)の幼虫を見つけました。復活してくるのでしょうか。

カカシ(案山子)を作ろうということになり、ボランティアの皆さんで見事なカカシ2体が出来上がり、田んぼの学校を盛り上げました。(竹田 勇)

下堰緑地のヒガンバナが咲いたよ

府中市西部、多摩川沿いの下堰緑地。用水跡を利用して作られた公園でしたが、長い間放置され、ごみが不法に捨てられていました。

一昨年から、府中かんきょう市民の会と地域住民が府中市に協力して整備にあたってきました。不法に捨てられたごみを撤去・清掃、とりわけ、多摩川から用水を伝って流れてきたと見られるヒガンバナの球根がたくさん出来ており、人の手を借りて「分球・移植」しなければならない状態となっていたことから、この「救出作戦」に取り組みました。

9月には、この救出作戦が効を奏し、ヒガンバナが見事に咲きました。(9月23日撮影)



せっかく咲いたヒガン花だが無残にも哀れな姿（左）
急遽、「花を大切に」と呼びかけも（上）

これを確かめるために9月23日、「ヒガン花を見る会」が行われ、当会会員5人を含む地域の市民ら20人が、清掃活動を行ったあと、ヒガンバナを楽しみました。

しかし、問題もあります。ごみが捨てられ、折角咲いたヒガンバナが何者かによって手折られるという残念な事件も起こっています。一部の市民のマナーの悪さには強い憤りを覚えます。市民の熱意によって美しく咲いたヒガンバナ、これからも大切にしたいものです。



落ち葉の銀行を知っていますか？

「落ち葉の銀行」とは、市民が公園清掃で集めた落ち葉を預金とみなし、1年後には腐葉土を利子として戻す仕組みです。「府中市落ち葉の銀行」は、平成14年10月に開店しました。営業期間は落ち葉の多い11月から2月までの4カ月間です。

平成18年度は、45カ所の公園清掃にかかわる29団体が70リットルの袋で1,258袋の落ち葉を預金しました。それらは今、浅間山の麓にある圃場に積まれ、時々切り返されながら腐葉土に生まれ変わっています。来年の6月頃、それぞれの団体に出来上がった腐葉土が配布される予定です。

ごみ減量にも効果的

かんきょう市民の会では3カ所の公園清掃で、落ち葉の銀行に協力しています。良質な腐葉土を作るためには、落ち葉以外のものを入れないように注意することが必要です。例えばタバコの吸殻や紙ごみは取り除きます。また油分の多い松やイチョウの葉も入れられません。公園にまいてある砂利が混ざるのも困りものです。いろいろと手間がかかりますが、せつせと落ち葉集めに協力しています。

私が参加している押立緑地の清掃では、多い時は1回で10袋以上の落ち葉が集まります(写真)。



用水は生きていた!

「小川の生きものを調べよう」で子どもたちが学習

2年前に本宿用水がポンプ取水に替わってから、魚の型が小さくなり数もかなり少なくなっていました。さらに台風が来るとポンプが止められて水量が不安定になるなど、魚とりがやりにくい状況が続いていました。

また多摩川本流では、府中市主催の水辺の楽校(ガサガサ魚とり)がほぼ月1回の割で開催されるようになるなど、子どもたちの水遊びの環境が整い、当会で同じような催しを続ける意味があるのか…催しの担当として以前より引かかっています。

そんな中、イベントの直前になって用水の水が突然止まってしまう、いたるところに川底がでて、小川というより浅い水たまりという状況になってしまったのです。魚とりにならない事態も懸念されたため、急遽トンボの観察を追加することになりました。

また、魚がとれない子のために、筆者の自宅で飼っていたフナやドジョウなど十数匹を会場に持参し、プレゼントする手配もしました。生き物がいない瀬川の用水…この調査も今回でお終いか…そんなことが頭をよぎります。

9月16日は参加者約40名。真夏のような強い日差しが戻って、観察会には申し分ないお天気。しかし用水路は前日の夕方よりさらに減水して、しばらくはザリガニしかとれず魚とりになりません。うーん 困った、どうしよう。

誰かが水たまりの深いところでコブナを沢山とった子ども



こんなところに魚がいるの?

時代のことを思い出し、用水の一番深そうなところへ網をいれたら、なんとコイやドジョウなど型のよい魚がびっくりするほどとれました。その後、下流の橋の下の水たまりでも大きな魚がたくさんとれ、終わってみると合計300匹(第3回目に次ぐ2番目の記録)となり、みんな大満足の様子でした。魚たちは水が少なくなると深みに集まる習性があり、たまたま今年は時期があっただけ、一歩間違えば干からびた魚の死骸だけだったかもしれないのです。

また、例年より型が大きかったのは台風9号による増水の影響かもしれません。

トンボの話に夢中になる子どもたち

魚とりが一段落したところで木陰に集まり、トンボ博士Tさんのトンボ教室です。生きたトンボを見せながらシオカラトンボ・ウスバキトンボ・ナツアカネ…の見分け方や生態の説明をはじめると、子どもたちは驚くほど真剣に聞いています。

午後は四谷文化センターに戻り、恒例となった農工大のMさんの話と参加者との懇談の後、散会しました。四谷の田園地帯には、まだ生きものたちの姿が消えていません! スタッフの反省会では、催しの今後のあり方について検討しました。「農業用水は田んぼと一体となった独自の環境があり多摩川とは異なること」、「参加者から継続を期待する声があること」、「四谷の田園は市民の会として“農のある景観地区”として保全を訴えていること」から、今後時期を検討するなどして継続することになりました。なによりも、子どもたちの歓声と生き物が懸命に生きている姿がスタッフ一同の励みとなりました。(野口道夫)



これは何トンボかな

府中水辺の楽校

夏の多摩川 ガサガサ魚とり

8月の「府中水辺の楽校」は、25日（土）、郷土の森との共催で開催されました。場所は、多摩川・大丸堰周辺でした。

一般募集応募の子ども達30名と、「水辺の楽校・子ども実行委員」10名が参加しました。このところ水辺の楽校の応募者が多く、市の広報掲載の直後には満員になって、関心が高くなって来ています。

さて、当日の基本テーマは、「多摩川自然体験とガサガサ魚とり」。子ども達全員、ライフジャケットを着て、準備万端。定刻10時に開会。

主催者側の挨拶、注意事項、魚の捕り方の説明のあとまずは河原のゴミ拾いをしました。河原には、大人たちのタバコの吸殻、花火の燃えかす等、子ども達への反面教材（？）ばかりでした。「河原であそんだら、みんなはゴミを持って帰ろうな」。スタッフが呼びかけていました。ゴミ拾いが終わると、子ども達は思い思いに川に入った行きました。

上流の深いところや、合流点の深みの近くには、スタッフがロープを張って安全を確保していました。

カヌーで川の流れを体験

今年から、水辺の楽校では、スタッフがカヌーを浮かべて、子ども達を乗せています。カヌーに乗って、子ども達は、堰の上のゆったりとした川の流れや、合流点の流れの動きを体験します。

このカヌーは、特に低学年の子どもには大人気で、岸で順番を待って乗っていました。

川で遊ぶ時は、流れが急に速くなったり、方向が変わったりする場所を確認しておく必要がありますが、今は大人でも注意が行き届かないで、事故のもとになっています。

子ども達は、カヌーに乗って、川の流れを体で覚え



なにが捕れたかな？

魚とりには大人も夢中

るのです。中にはやみつきになって、「もっと乗りたい」、と云う子どももいました。

夏のイベントで主催者が気遣うのが熱中症です。川遊びも例外ではなく、水の事故と同時に、休憩や水分の補給をスタッフが呼びかけていました。「皆さーん水の補給をしてくださーい！！」。

大人も子どもも、魚とりに夢中で、なかなか手が止まりません。どこかのお母さんが子どもを呼んで、水を手渡していました。ちょっとひと安心。

この夏は、8月に入って雨が少なく、川の水量がいつもの夏より少ないため、魚とりに、みんな悪戦苦闘していました。

そして、終わりの時間が来ました。「時間でーす！ 川から上がって下さーい！」

みんな名残り惜しそうに水から上がっていました。

多摩川にはまだまだ自然が残っている

水から上がった子ども達は、夫々の成果を、専門のスタッフに見せて、魚の名前を教えてもらいました。

オイカワ、シマドジョウ、ジュズカケハゼ、ギンブナ、キンブナ、コイ（稚魚）、タモロコ、モツゴ、アメリカザリガニ、等等。

多摩川の魚種も、まだまだ豊富でした。中には、ウシガエルのオタマジャクシを捕らえてビックリしていた女の子もいました。

こうして親子で楽しく過した、夏の水辺の楽校は終わりました。一人の事故もなく、皆が満足している顔を見ると、スタッフもホットひと安心。

参加者の中には河原の木陰で弁当を広げている家族もあり、自然に親しむ姿が微笑ましくもありました。

（梶島弘通）



夏の日差しの中、思わず入ってみたいくなる多摩川での魚捕り
（写真はいずれも「府中水辺の楽校」から提供を受けました）



オランダの道の話

館 浩道

オランダはドイツとともに「自転車天国」と呼ばれている。
7月末から8月初めにかけて、ベルギーからオランダを約500キロほどサイクリングしたので、オランダの道のことについて報告してみよう。

クルマとそれ以外の2重システム

日本では「自動車専用道」といえば、高速道路のことと相場が決まっている。自転車はおろか、いわゆるバイクも入れない。ところがオランダには、いたるところに「クルマだけの道路」がある。もちろんオランダにも日本のような高速道路があるが、この「クルマだけの道路」はいわゆる高速道路ではない。



ランドバウト（左上）の外周に自転車歩行者専用道がつけられている。専用道にはバイク用、自転車用の車線まである

ある日、ボクはオランダのサイクリング道路を走っていて、不覚にもいつの間にか、この「クルマだけの道路」に入り込んでしまった。交差点で止まったところ、横に止まったトラック運転手から「ここは自転車は通れない。向こうの道だよ」と指さしてくれたのが、木立のなかの別の道路だった。

オランダは、高速道路は別にして、市民が日常的に使う道路が2種類存在するのである。

一つは、「クルマだけの道路」で、日本流に云えば「国道」や「県道」など比較的、クルマの交通量が多い道路。ここには自転車はもちろん、原付バイクも入れない。もしここを原付バイクが走れば、交通違反となる。



自転車・歩行者専用道路がない場合は十分な幅の専用レーンが必ず確保されていて、それは途切れることがない。

では、自転車や原付バイクはどこを走るのか。オランダには「クルマだけの道路」に平行して自転車や原付バイクのための道路が併設されている。歩行者のほか、馬や馬車もこの道路を通っているところを見かけたことがある。所によっては道路幅は4メートルほどあり、快適なのだが、慣れないうちは後ろから原付バイクが追い越してゆくのでびっくりすることもある。ドイツをサイクリングしたこともあるが、ドイツの場合はサイクリング道路には歩行者は入れないので、この点、オランダは少し違うが、クルマから逃れて走れるだけでもいい。

オランダには「ランドバウト」といって信号のない交差点の役割を果たしている分岐点があるが、クルマ以外は、そのランドバウトの外側に設けられた専用の外周路を通り、目的の道に進む仕掛けだ。

もっとも、全ての車道に平行して、こうしたクルマ以外の交通手段が通行できる道路があるわけではなく、日本の「市町村道」に相当する道や、生活道路には必ず専用のレーンがあり、自転車・歩行者はそこを通らなければならない。日本にも専用レーンを設けているところがあるが、必ずクルマが駐車しており、進路をふさがれ、これを迂回するために車道にでるなど危険きわまりないが、オランダではこうした道路には専用レーンの外側にクルマのための駐車帯が設けられているので、問題なく走れる。

このようにオランダには2重の道路システムが全国をカバーしている。これはまさにカルチャーショックであった。ひるがえって日本が如何にクルマ優先社会であるかを再認識させられたようなわけである。